

Anders Vaa (著) *Dialektboka*

Oslo: Spartacus Forlag, 2016, 223pp.

鈴木 博之

1 本書の構成

本書は、ノルウェー語（ブークモール）で書かれた、ノルウェー国内で話される様々な言語・地域方言を音声資料とともに紹介するものである。本書で対象とする、タイトルにもある「方言 (dialekt)」は、ほぼ地域方言に限られる。1つの地域方言についての社会的差異（社会方言）については特別な言及がない¹。

本書は、ノルウェー語の地域方言の記述が大半を占めるが、北サーミ語²、ルーレサーミ語³、クヴェン語⁴についての解説ならびに裏表紙と一体化した独特の再生方式による音声が付属しているのが特徴的である。本書は導入部に続いて全5部に分かれ、これに目次、序文、謝辞、専門用語の解説、注、参考文献、録音資料の概要が加わる。また、ところどころに独立のコラムが配されている。全5部は地域、言語別に次のように分かれている。

- | | |
|---------------------------|--------------|
| 1. 東ノルウェーの方言 | 4. 北ノルウェーの方言 |
| 2. トロンネル ⁵ の方言 | 5. 少数民族の言語 |
| 3. 西ノルウェーの方言 | |

本書評では、まず2節で本書の特色をкаいつまんで紹介したのち、3節で導入部と全5部に分けて内容を簡潔にまとめながら、本書のような構成の書物がもつ言語学的な意義について若干の意見を述べる。続いて4節で問題点を指摘し、最後にまとめる。

¹ノルウェー語の書記言語やピジン (Nesse 2016:72-82) などについても、本書は含んでいない。

²ISO 639-3 コード: sme。

³ISO 639-3 コード: smj。

⁴ISO 639-3 コード: fkv。

⁵ノルウェー中部、トロンハイムを中心とする地域を指す。Dalen et al. (2008) 参照。

2 本書の特色

ノルウェーにおいて、自国の言語に関する国民の関心度は高い。それは、ノルウェー語に公式の書き言葉が2種類⁶あり、口語に至っては各地域の方言を話すことが公私を問わず様々な場面において日常的に行われているため、言語差異についての関心が自然と現れてくるものといえる。実際、これまでに学生、専門家のみならず、一般読者も射程に収めたさまざまな方言に関する書籍が出版されている (Vigeland 1981, Jahr (red.) 1990, Torp & Dahl 1996, Johnsen (red.) 2002, Papazian & Helleland 2005, Hanssen 2010 など)。一方で、ノルウェーにはサーミ諸語をはじめとする少数民族語も話されており⁷、ノルウェーで最近出版されているノルウェーの言語を扱った書物であれば、大抵これらについても触れられている (Hanssen 2010:195-206)。本書もまたそのようである (pp. 193-206)。

著者は本書の前書き (pp. 8-9) において、本書は通常のノルウェー語方言に関する出版物とは異なると述べている。それは、本書の第一の内容は、記述ではなく音声であるという点である。本書には、計 83 トラックの音声収録されており、本書導入部における特定の音声現象についての録音が 9 トラックある以外は、ノルウェー各地の出身者による 1 分程度の発話で占められている (スクリプトなし)。各録音には、本文中に話者の出身地、性別、年齢が記載されている。加えて、12 人の人々については、「私の方言」というテーマでのスピーチがスクリプトとともに収録されている (pp. 82-82, 86-87, 90-93, 98-101, 106-107, 122-123, 142-143, 146-147, 172-174, 186-187)。このスクリプトはすべて国際音声字母による簡易音声表記 (IPA) でのみ記述されており、おそらく一般の読者には理解が困難であろうと推察する。しかしながら、これらすべてには音声収録されており、ノルウェー語話者ならかなりの程度理解できるようである。ただし、おそらく編集上の都合で、IPA で転写されたすべての音声収録されているのではなく、途中で切れているのは残念である。評者には聞いて理解可能な方言と不可能な方言に分かれるが、後者については、およそ文脈を考えながら、本書の記述に合わせて音対応などを考慮に入れば解釈可能な

⁶Bokmål と Nynorsk のことである。これらは書き言葉であって、話し言葉を指しているのではない。ISO 639-3 コードではそれぞれ nob、nno と別々に認識されている。本書評冒頭で「ブークモール」と指示しているのは、この点と関連する。

⁷サーミ諸語については、北サーミ語、ルーレサーミ語、南サーミ語 (ISO 639-3 コード: sma) について、ノルウェー語で書かれた文法書や辞書、また、ノルウェー語話者向けの語学の教科書など、学術目的以外の出版物が多数出版されている。たとえば、北サーミ語については、Nickel & Sammallahiti (2014), Buljo (2006), Kåven et al. red. (2003), Guttorm et al. (1992-1993) などがある。ルーレサーミ語については、Nysto & Johnsen (2000) などがある。南サーミ語については、Bergsland (1994), Bergsland & Magga (1993), Magga (2009), Joma & Klemensson (2012) などがある。北サーミ語については、Eira (2003) や Henriksen (2007) など、方言研究の専門文献も出版されている。

部分もある。このように、評者にとっては一部に理解が困難な部分もあるが、この点を除けば、それぞれの話者が自分の方言に対してどのような考え、そして感情をもっているのかが生き生きと伝わってくる。方言の話者の考えに少しでも触れることができるようにという本書の設計は、提示の方法が若干不親切ではあるが、非常に印象的であり、歓迎されるべきものであろう。

これまでに出版されてきたノルウェー語方言の出版物の中でも、たとえば Papazian & Helleland (2005) のように、音声資料が付属しているものがあるが、多くはいくつかの方言による短編の語りか、会話のやり取りの収録にとどまっている。これに比べて本書では、方言分類にとって重要な役割を担う音特徴についてピンポイントで録音が付属し、実際の音声を参照することができるようになっている。また、これまでの出版物で広く用いられているノルウェー式音声表記をそれぞれ相当するであろう IPA に置き換えて記述しているのも評価すべき点である。たとえば、“tjukk l” 「厚い l」と呼ばれ、通常は [ʈ] と音写されてきた音声である (Vigeland 1981:178, Sandøy 2011:321) が、[ɕ] (そり舌はたき音) であることが分かる。このような音写の方針は、一般言語学的に見て有益であることは間違いない。

加えて、本書にはわずかではあるが少数民族語にも録音が付属している。特にルーレサーミ語やクヴェン語の音声は出版物に付属しているものが少ない⁸ ようである。ルーレサーミ語については、教科書 *Sámásta* (Nysto & Johnsen 2000) が音声 CD 別売で出版されているが、ルーレサーミ語の分布地域はスウェーデン側が広く、また話者人口も多いため、録音がノルウェー出身のサーミ人によって行われているとは限らない⁹。こういう意味で、本書のルーレサーミ語は貴重な音源であるといえる。

本書は以上に述べた 3 点において特に類書とは異なっているといえる。

3 本書の内容の紹介とその評価

本書の具体的な記述は、ノルウェー語方言の概況の部分と全 5 部の地域別の記述に分かれている。概況部分 (pp. 18-66) は方言分類の基準 (pp. 18-49) とノルウェー語の歴史の記述 (pp. 51-66) に分かれる。前者はさらに音特徴 (pp. 18-34) と形態の特徴 (pp. 34-49) に二分される。ここにまとめられる事柄は、ほとんどが巻末の参考文献 (pp. 218-220) に挙げてある先行研究をもとに記述したものであり、巻末注 (pp. 214-217) に引用の詳細が記されている。一般読者向けの書物であるため、この記述方法が読みやすいとの判断であると考ええる。内容の記述はいずれも簡潔であるが、

⁸ 評者も未見である。

⁹ 評者は付属になっている音声 CD もまた未入手である。

音声にかかわる部分は録音と連結しており、これによって文字からではわかりにくい具体的な発音の差異や専門用語が示す音それ自体を参照でき、理解しやすくなるように工夫がなされている。

概況部分における方言分類の基準は、確かに先行文献とほとんど重複しているが、ノルウェー語方言を知るうえで不可欠なものである。本書では音特徴として11点、このうち地図化されているのが7点、文法特徴については、地図化されているのが7点ある。具体的に地図化されている計14種類の特徴は次のとおりである。

- | | |
|--------------|------------------|
| 1. 声調の類型 | 8. 不定詞の語尾 |
| 2. 「厚いl」の有無 | 9. 女性名詞弱変化単数既知形 |
| 3. そり舌音の有無 | 10. 女性名詞強変化単数既知形 |
| 4. 口蓋垂r音の分布 | 11. 与格の有無 |
| 5. 語中閉鎖音の有声化 | 12. 1人称単数代名詞の形態 |
| 6. 硬口蓋化の有無 | 13. 1人称複数代名詞の形態 |
| 7. 流音の閉鎖音化 | 14. 否定辞の形態 |

ただし、これらの特徴を重ね合わせた地図は掲載されていない。ノルウェー語方言を扱う書物では、これらの特徴を地図化して示すことが広く行われているが、本書はそれらの記述を踏襲しつつ新たにカラーで地図を作成し直したものを提示するにとどまり、新しい記述は特に見当たらない。特筆すべきは、先にも述べたように、語形の記述に用いる音表記がより広汎に受け入れられている簡易IPA表記になっている点であろう。ノルウェー語方言学独自の記号体系を学ばなくても理解できるように工夫されているのが本書の特徴である。

全5部の地域別の記述は、方言区域ごとに記述の分量に差はあるものの、各地域全体の導入から入り、共通点を示したのち、下位分類の解説に入るといった形で、平均的な記述となっている。それぞれの区域に割かれたページ数は次のようである：東ノルウェーの方言(pp. 71-108)、トロンネルの方言(pp. 115-127)、西ノルウェーの方言(pp. 131-159)、北ノルウェーの方言(pp. 163-185)、少数民族の言語(pp. 191-206)。最後の少数民族の言語を除いては、各区域についての記述の構成はほぼ共通している。はじめに地域全体の言語特徴を数点指摘したのち、下位区分を設けてさらにそれぞれの内部で共通する特徴を数点述べていく形になっている。下位区分については、東ノルウェー、トロンネルについては各2種、西ノルウェーについては3種、北ノルウェーについては4種に分けられている。これらの下位区分が、おおよそノルウェーの地形と関連している点が興味深い。また、「都市方言(bymål)」については小節を

設けて独立した記述がある。オスロ (pp. 81, 84-85)、トロンハイム (pp. 126-127)、ベルゲン (pp. 151-153)、スタヴァンゲル (pp. 153-154)、ボードー (p. 176)、トロムソー (pp. 180-181) が相当する。これらは、都市によって性格が異なるものの、概して周辺の地域方言と非連続的な特徴を持ち、都市という各地域の人々が集まる地域であることから、一種の社会方言に数えられる面もある¹⁰。

この部分における録音は、各地域の出身者による短い発話であり、本文の記述そのものと直接関連することが録音されているわけではない。それぞれの発話の内容は、もちろん方言と関連しているが、あくまでも各地点の実際の発音がどのようなものであるかということが体験できるという仕組みになっている。収録方言数は合計 71 種で、4 部それぞれの内訳は次のようになっている。

- 東ノルウェー 24 種 (うち東部 17 種、中部 7 種)
- トロンネル 8 種 (うち内陸部 5 種、海岸部 3 種)
- 西ノルウェー 23 種 (うち北西部 8 種、南西部 11 種、南部 4 種)
- 北ノルウェー 16 種 (うちノールラン南部 2 種、ノールラン北部 4 種、トロムス・フィンマルク地区 7 種、東部移民地区 3 種)

それぞれの地域について収録方言数のばらつきが大きく見えるのは、そのまま方言の多様性と直結している。このように見ると、東ノルウェーと西ノルウェーについては、本文中の記述の比率がもっと高くてもよいと考えられる。

これに続いて、少数民族語として、北サーミ語、ルーレサーミ語、クヴェン語についてそれぞれ 1 点、同様の録音が付されている。

以上に述べた点から分かるように、本書の記述はノルウェー語諸方言を体系的に記述したものではない。各種方言の特徴を手際よく説明し、概観がつかめるようになっているが、記述言語学とは異なる。方言学的な視点からの記述ではあるが、その大部分は先行研究を踏襲しており、新しい知見を認めることが困難である点、方言学研究としての価値が高いとは言えない。本書の価値は、やはり音声にある。方言の紹介に音声資料を付すという考えと、収録されている音声資料の内容に、本書の価値を認めることができる。すなわち、方言話者の考えをそれぞれの方言で録音し、方言を方言で語った資料を全国からまんべんなく収集して一冊の本にまとめて収録するという方法と、母語話者自身の方言に対する価値観を反映した記述をコラムとして盛り込むといった試みに、新しい方言研究の成果の提示方法を見ることができる。

¹⁰一方、付け加えておくべきは、ノルウェー語には標準語が存在しない点である。Skalla (2015) など語学教材が記述する言語は、それ自体が 1 つの社会方言となる。

4 本書の問題点

本書のような設計の書物には先例がないと考えられるため、当然のことながら、問題点も散見される。特に方言地図作成において、単に個別の特徴に基づいて描画した地図だけではなく、複数の特徴を組み合わせた地図があれば、方言区画を総合的に理解するうえで大いに貢献できるであろう。この点は他のノルウェー語方言を扱った出版物でもほとんど認められないが、言語学的視点から見て、各種分析を統合した地図は用意するほうが方言区画の理解の促進につながるはずである¹¹。

また、ほぼすべての地図が何らかの行政区分によって線引きされ描画されている点は、ノルウェー語方言全体を扱った先行研究と同様、疑問がある。もちろん、方言区画を引くこと自体現実的でないことは地理言語学的研究が示すとおりである（Bandle 1967）が、いずれの書物も行政区画が方言区画を示しているのは、個別方言の記録が進んでいるのと対照的に変化が見られず、方言区画線に近い地域の共同体が用いる言語がどのようなものであるのかは、たとえば、Sandøy (2011) など、より専門的な個別の論文や著書などに当たらなければ分からないところが問題である。巻末注 (pp. 214-217) に若干文献が挙げられているが、実際はもっと多くの著作が出版されているため、より多くの文献を紹介するほうが有益であると考ええる。

しかし何よりも問題と考えるのは、付属録音のフォーマットと音質であろう。なぜ今の時代に本書に特化した装置を1冊ずつ付属させなければならないのか。しかも、これは裏表紙と一体化しており、利用に至極不便である。トラック数も99以下であるから、音楽CDフォーマットやCD-ROMを付す形態のほうが経費削減にもなるだろう。音質もまた、聴取には問題がないものの、決してよい音質であるとはいえない。読み出し不可であるため、音声の電子的ファイル自体がどのような形式であるのかはわからないが、圧縮してであると予想される。著者は、この点について何ら意見を表明していない。現在の語学教材では、音声資料をどこかのウェブサイトにおいて公開するというシステムもある¹²。これは、経費削減と同時に、CDを聞かない利用者が増えたことも影響していると聞く。しかし本書は、このような方法でもデータを公開していない。これが本書最大の疑問点である。もしも音源の提供に特別な事情がないのであれば、汎用的な配布方法を採用するほうが利便性の面で明

¹¹より専門的な内容について、ノルド系諸言語の言語地図をオンラインで提供しているサイトがあり、地理言語学的の枠組みを用いた地図を見ることができる：The Nordic Atlas of Language Structures (NALS) Journal, URL: <http://www.tekstlab.uio.no/nals/#/features> (2016年12月12日閲覧)

¹²たとえば、Routledgeの語学教材Colloquialシリーズは、音声データをウェブ上で公開している。URL: <http://www.routledgetextbooks.com/textbooks/colloquial/default.php#home-top> (2016年12月12日閲覧)。また、ノルウェー語の教材でも、このシステムを採用しているものがある（Skalla 2015）。

らかに理にかなっていると考ええる。

5 まとめ

本書におけるノルウェー語方言学に関する記述は、いわば先行研究のまとめのような印象を与える。しかしながら、個別の方言の提示の仕方や、各方言話者の自身の方言に対する思いをその方言によって語り、録音と音表記で読者に提供するという試みは、これまで類書に見られない新たな構成であり、かつ特定の方言区域に偏ることなく言語分布地域全体から平均的に採録しているため、方言の多様性に一度に触れることができるという点も評価できる。これは逆に言えば、方言の分化が多様な地域については、その紹介が十分ではないという欠点にもなるであろう。これを解決するには、本書のような構成を維持しつつ、取り上げる方言数を増やし、全体的に記述を増やすことが望ましい。しかしながら、一般向け商業出版であることも勘案すると、あまりに記述が煩雑過ぎても問題になる。

本書の価値は、おそらくノルウェー語の理解がおぼつかなくても、音声に触れるだけで意味のある書籍になっていることにある。意味を理解することと方言の多様性に触れることは異なる。方言の多様性をいかに提示することができるのか、本書はこの点で新しい方法を示しているといえるだろう。方言研究の盛んな言語もそうでない言語も、大抵の場合地域差異は存在する。1言語とされている言語を構成する諸方言をまとめて提示するという観点から見れば、本書は十分に参照してみる価値がある。

参考文献

- Bandle, Oskar (1967) *Studien zur westnordischen Sprachgeographie: Haustieterminologie im Norwegischen, Isländischen und Färöischen*. København: Munksgaard.
- Bergsland, Knut (1994) *Sydsamisk grammatikk*. Kárášjohka: Davvi Girji.
- Bergsland, Knut & Lajla Mattsson Magga (1993) *Áarielsaemien-daaroen baakoegærja / Sydsamisk-norsk ordbok*. Idut.
- Buljo, Karen Anne (2006) *Boađe! Ohppiidgirji 1-2*. Kárášjohka: Davvi Girji.
- Dalen, Arnold, Jan Ragner Hagland, Stian Hårstad, Håkan Rydving & Ola Stenshaug (2008) *Trøndersk språkhistorie: Språkforhold i ein region*. Trondheim: Tapir Akademisk Forlag.

- Eira, Inger Marie Gaup (2003) *Giella vákkis vággái: Gáivuona dialeavtta suokkardallan*. Guovdageaidnu: Sámi Instituhtta.
- Guttorm, Inga, Johan Jernsletten, & Klaus Peter Nickel (1992-1993) *Davvin* 1-4. Oslo: Folkets Brevskole.
- Hanssen, Eskil (2013) *Dialekter i Norge*. Bergen: Fagbokforlaget.
- Henriksen, Marit B. (2007) Kartlegging av den sjøsamiske dialekten i Altafjord-området — med vekt på foneminventar, fonemdistribusjon og fonologisk variasjon. In Tove Bull, Jurij Kusmenko & Michael Rießler (red.) *Språk og språkforhold i Sápmi*, 13-23. Berlin: Nordeuropa-Institut der Humboldt-Universität.
- Jahr, Ernst Håkon (red.) (1990) *Den store dialektboka*. Oslo: Novus Forlag.
- Johnsen, Egil Børre (red.) (2002) *Vårt eget språk*. Oslo: Aschehoug & Co. (W. Nygaard).
- Joma, Liv Karin, & Åse Klemensson (2012) *Gïeline áahpenidh 3: Lohkehtæjjan bihke-dimmie Áarjelsaemien voestesgieline*. Oslo: Solum Forlag.
- Kåven, Brita, Johan Jernsletten, Ingrid Nordal, John Henrik Eira, & Aage Solbakk (2003) *Sámi-Dáru Sátnegirji*. Kárášjohka: Davvi Girji.
- Magga, Lajla Mattsson (2009) *Norsk-sydsamisk ordbok / Daaroen-áarjelsaemien baakoegærja*. Idut.
- Mæhlum, Brit & Unn Røyneland (2012) *Det norske dialektlandskapet: Innføring i studiet av dialekter*. Oslo: Cappelen Damm Akademisk.
- Nesse, Agnete (2016) 10. Kontakt: Universelle tendenser når flere språk møtes. In Sandøy (red.), 72-85.
- Nickel, Klaus Peter & Pekka Sammallahti (2014) *Nordsamisk grammatikk*. Kárášjohka: Davvi Girji.
- Nysto, Anders & Sigmund Johnsen (2000) *Sámasta 1: Julevsámeigiella álggijda*. Báhkko.
- Papazian, Eric & Botolv Helleland (2005) *Norsk talemål: Lokal og sosial variasjon*. Kristiansand: Høyskoleforlaget.
- Sandøy, Helge (2011) *Romsdalsk språkhistorie: Frå runer til sms — og vel så det*. Oslo: Novus Forlag.
- Sandøy, Helge (red.) (2016) *Norsk språkhistorie I: Mønster*. Oslo: Novus Forlag.

Skalla, Werner (2015) *Mysteriet om Nils: Norskurs for deg som kan noe norsk fra før (nivå B1-B2), Lær norsk med en spennende historie*. Furth im Wald: Skapago.

Torp, Arne & Berit Helene Dahl (1996) *Språklinjer*, 2. utgave. Oslo: Aschehoug & Co. (W. Nygaard).

Vigeland, Bjørn (1981) *Dialekter i Norge: Målmerker med språkhistoriske forklaringer*. Oslo: Universitetsforlaget.

受領日2017年2月23日

受理日2017年4月15日